

むかし、あるところに、貧しいおじいさんがいました。

あるとき、おじいさんは、町に出かけた帰り道、子どもたちが集まって、小さな犬をいじめているのに出くわしました。子どもたちは、小犬の首になわを付けて、堰（せき）の水に、どんぶりとつけては引き上げ、どんぶりとつけては引き上げていました。

「やれやれ、かわいいそうに」

おじいさんは、巾着からわずかなお金を出して、小犬を買い取りました。そして、家に連れて帰ると、「それ、ご飯だ」「それ、魚を食べる」と、たいせつに育てました。

おじいさんは、ねこも飼っていて、そのねこと小犬は、すぐに仲良しになりました。

あるとき、おじいさんが、薪の山をくずしていると、中から、小さな白へびがちよろちよろと出て来ました。白へびは、おじいさんをこわがるでもなく、かえってなつくので、ご飯をなめさせて育てました。おじいさんは、人に見られないようにと思つて、白へびを手箱の中に入れて飼いました。すると、白へびは、手箱いっぱいに大きくなりました。そこで、たんすに入れておくと、たんすいっぱいに大きくなりました。

ある日、おじいさんは、白へびにいました。

「へび殿や、へび殿。おまえもひとり歩きできるほど大きくなった。もう、とびやたかにさらわれることもなからうから、どこへでも好きな所へ行つて暮らせ」

白へびは、おじいさんのひざから、庭のほうへによりよると下りて行きました。そして、庭の五葉の松の根方の穴に、しずしずと入つて行きました。おじいさんは、

「ここが白へびの古巣だったか」と、穴をのぞきました。すると、穴の奥に、ぎんがしやんがと光る物があります。

「ありや、なんだ」

おじいさんが手に取つて見ると、それは、うろこ玉という、世にもめずらしい宝物でした。おじいさんは、

「はてさて、これは、へび殿のお礼だな」と、うろこ玉をたんすの中に大事にしまつておきました。うろこ玉は、毎日、一粒ずつ、黄金を出してくれました。おじいさんは、みるみるうちに、たいそうなお金持ちになりました。

おじいさんは、うろこ玉の出してくれるお金で、呉服屋の商売を始めました。商売はうまくいって、ますますお金持ちになりました。

あるとき、上方から、ひとりの若者が、お店の番頭に使つてくれとやってきました。若者は、目から鼻にぬけるようなかしこい男だったので、おじいさんは気に入って、店のことを何でも任せようになりました。ところが、あるとき、若者は、たんすの中からうろこ玉をぬすんで逃げてしまいました。おじいさんは、くやしがりましたが、後の祭りでした。

うろこ玉がなくなつてからというもの、おじいさんは、もとのように根つきり葉つきりな貧乏たれになってしまいました。とうとう、おじいさんは、ねこをよんでいい

ました。

「ねこ殿や、犬殿や。おまえたちにやるごまめいっぴき、菜っ葉ひとかけもなくなつてしもうた。この家を出て、どこぞで暮らしていつておくれ」

ねこは、おとなしく聞き分けて、家を出ました。

にひきは、うろこ玉をぬすんだのはあの番頭だと考えました。そこで、番頭の足跡をかいで、どこまでもどこまでも追いかけて行きました。どんだん行くと、上方に着きました。

番頭は、町のまんなかに店を構えていて、たいへん繁盛していました。ねこは、なんとかしてこの店に入りこみたいと思いましたが、なかなか入るすきがありません。そこで、ねこが、店の台所に回つて大きな魚を取つて逃げるふりをしました。犬は、ねこを追いかけるふりをして、魚を取り返して来ました。すると、家の者が、犬を気に入つて、飼うことにしました。ねこも、家のねずみをかたっぱしから取つたので、やはり、気に入られて、飼われることになりました。

さあ、たいへんなのは、この家のねずみたちです。昨日はたろうねずみが取られるし、今日は次郎ねずみが取られるしで、大さわぎになりました。そこで、ねずみがみんなで相談して、使いを立てて、ねこにたのみました。

「どうか、わたしたちを取らないでください。どんな事でもお聞きしますから」
ねこは、

「では、奥の部屋のたんすの中から、うろこ玉を持って来い。そうすれば、おまえたちの命を助けてやる」といいました。

ねずみたちは、すぐに、みんなで奥のたんすをがりがりかじつて、うろこ玉を取り出して、ねこにわたしました。ねこは、一刻も早く、おじいさんにうろこ玉をとどけようと、店をぬけ出しました。

にひきが、どんだん走つて行くと、大きな川に出ました。ねこが、

「はて、どうしてわたろうか」と考えていると、犬が、

「おらの背中に乗れ」といいました。そこで、ねこは、うろこ玉をくわえて犬の背中に乗りました。犬は、ねこを乗せて川をわたりました。

むこう岸に着くと、きつねが出て来て、

「おいおい、ねこ殿や、犬殿や。おまえたちの持っているその丸い物はなんだ。まりならば、ちよつとのま、投げっこして遊ばないか」といいました。にひきは、

「もう川もわたつたことだし、だれも追いかけてこないだろう。ちよつとぐらいいいだろう」と思いました。

ねこは犬ときつねは、うろこ玉を、あつちに投げたりこつちに投げたりして、遊びほうけていました。ところが、きつねが受けそこねて、うろこ玉を川に落としてしまいました。

「さあ大変だ、さあこまった」と、三匹は、川の中をくまなく探しましたが、うろこ玉は見つかりませんでした。

ねこと犬は、しかたなく、しよんぼりしよんぼり、野こえ山こえ、帰って行きました。町まで来ると、魚屋が一軒ありました。店先に、今釣って来たばかりの大きな魚が、びんぴんとはねていました。にひきは、せめておじいさんのお土産に持って帰ろうと、魚をかつぱらって、どんどん逃げて行きました。

走って走って、やっとおじいさんの家に着きました。おじいさんは、「よく昔のことをわすれないで、大きな魚を買って来てくれた」といって、よろこびました。

さつそく、おじいさんが、魚に包丁を入れると、ひと所、切れない所があります。横にそいでみると、中からぽろんとうろこ玉が出て来ました。おじいさんはよろこぶし、ねこと犬も、ちよんちよんはね回ってよろこびました。

うろこ玉のおかげで、おじいさんの家は、前のように繁盛して、みんなで仲良く暮らしましたとき。
どんどはれ

原話：『昔話研究第10号』「南部昔話抄」平野正／三元社
再話：村上郁